

ヤコブ1章19～27節「みことばを実行する人に」

神のみことばを聞いて、悔い改めと信仰告白に導かれ、みことばを聞いて、みこころに従う行いができます。

1. みことばを受け入れる（：19～22）

みことばに対して信仰者がどのような態度であるべきかをヤコブは語ります。

「聞くのに早く、語るのに遅く、怒るのに遅くありません」。まさにこのことは「人はだれでも」心に留めておく必要があるでしょう。人を傷つけたり、失敗したりして、後悔することがあります。まさに20節にあるように、「人の怒りは神の義を実現しないのです」。私たちの抱く怒りが問題を解決することはありません。私たちが正義の神に代わってさばくことができるわけではありません。

三つのことが重ねて語られていますが、まず大切なのは「聞くのに早く」です。みことばによって神の語りかけを聞くのです。私たちが「真理のみことばをもって生んで」くださった神は、みことばをもって語りかけ、私たちを教え、戒め、矯正し、正しい歩みに導いてくださいます。そして、語るのに遅く、怒るのに遅くなるでしょう。

みことばをどのように聞くのでしょうか。21節。申命記の中でモーセは民を励ましました。「まことに、みことばは、あなたのすぐ近くにあり、あなたの口にあり、あなたの心にあって、あなたはこれを行うことができる」（30:14）。また、預言者エレミヤは神、主が後の日に結ぶ新しい契約についての主のことばを告げました。「わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」（31:33）。このような旧約聖書のみことばに基づいてヤコブは語っているのだと思います。主がご自身の民の心にみことばを書き記し、植え付けてくださいます。そのために私たちの側でも、みことばを聞いて、それを素直に受け入れる必要があります。

そして、みことばを素直に受け入れるとき、私たちはふさわしい歩みへと導かれます。「あなたがたのたましいを救うことができます」。ここでの「救う」とは、キリスト者たちがしだいにきよめられていくこと、最終的には終わりの日に神の救いの働きが完成することを指しています。

私たちは試練や誘惑にあいます。試練の中で怒りたくなります。誘惑を受けて、心に汚れや悪があふれてきます。しかし、その時には静まって、みことばを聞き、受け入れることが必要です。みことばによって励まされ、希望をいただいて、試練にも耐えることができます。みことばによって諭され、誘惑を退け、神の完全な賜物に心を向け、罪から離れることができます。そうして、主のものとして聖められていくのです。

2. みことばを行う（：22～25）

みことばを聞くこと、聞いて受け入れることが大切であると強調されています。その上でヤコブは、聞くだけでなく、みことばを行うようにと勧めます。22節。

「みことばを行う人」と対比される「聞くだけの者」のことをどのように語っているのでしょうか。まず、「自分を欺いて」いると言います。みことばが教えていることが分かり、自分の状態を示され、どのように応えるべきかを促されます。それでも行動しないことが「自分を欺いて」いることです。

さらに、そのような人のことを比喩によって説明します。23～24節。鏡で自分の顔を見ます。顔を洗うべき、髪をとかすべき、と分かっても、何もしないで鏡の前から離れ、その自分の状態を忘れてしまいます。「みことばを聞いても行わない人」はそのようだと言います。この場合、鏡とはみことばです。みことばによって、自分がどのような者であるか、どのようにすべきなのかを映し出されます。それを見るのですが、それに基づいて行動しないのです。

そうではなく、みことばによって示され、促されることをごまかさず、応答することがみことばを行うことなのです。

みことばに応答する鍵はどういうことでしょうか。25節。みことばは鏡であるだけでなく、「自由をもたらす完全な律法」を見させてくれます。律法にはいくつかの役割があります。まず、神の基準を教えます。神に対して人がどうあるべきか、また人に対してどうあるべきか、その基準を教えています。けれども、その神の基

準を私たちが守れないこと、私たちの罪を示します。そうして救い主イエス様のもとに私たちを導きます。ガラテヤ書で「こうして、律法は私たちをキリストに導く養育係となりました」(3:24)と語られている通りです。

さらに、悔い改めて、救い主イエス様を信じて、新しいいのちに生きるようになった者たちには、喜んで神に従うことができるように指針を与えます。

律法は神からのものであり、良いものですが、人は自らの罪のゆえに律法を完全に行うことができず、律法に閉じ込められたようでした。しかし、イエス・キリストは律法を完全に成就されました。キリストを信じて新しくされ、聖霊を与えられたキリスト者たちは、聖霊の助けをいただいて、律法に示された神のみこころを行うことができ、自由を与えられるのです。

そのようにキリストを通して見ることが出来る「自由をもたらす完全な律法」を「一心に見つめて、そこから離れない人」は、みことばを行う人になることができます。「行う」と言っても、それは私たちの側の努力というより、神の恵みによって助けられて行うことができるのです。そして、そのようにみことばを行う人は祝福されます。

3. 御前できよく汚れのない宗教 (: 26~27)

みことばを聞くことから始まり、みことばを行うことへと進みます。ただそこで注意すべきことがあります。26節。「みことばを行う」ことを願いつつ、私たちが陥りやすい弱さを取り上げています。その一つは、「自分の舌を制御せず、自分の心を欺いている」ことです。

主への賛美や祈りを口にしながら、同じ口から人を呪うことばや汚いことばが出てくることがあります。あるいは、心の中には怒りや蔑みの思いがあっても、それを隠して口では逆のことを言うことがあるかもしれません。毎日聖書を読み、毎週礼拝に出席していても、もし舌を制御せず、心が真実でないなら、その人の信仰生活はむなしなもの。つまり、ヤコブは行いの大切さや必要性を強調しているようでありながら、形だけの信仰生活を批判しているのです。

ことばを制御し、心に真実を満たすことは、私たちにとって弱い点ではないでしょうか。自分の心と舌を神のものとして献げることができるように願います。

私たちが陥りやすい弱さとしてさらに二つのことを挙げていますが、それを積極的な表現で語り、なすべき務めとして勧めています。27節。

その一つは、孤児ややもめ、困っている人たちへの配慮です。神は弱い立場の人たちへの配慮を命じています。旧約聖書には孤児ややもめに対して配慮するようにとの主の定めが繰り返し記されています。また、初代教会は孤児ややもめの世話をしました。神の恵みを受けて感謝し、分かち合っている信仰者たちの姿がありました。社会的責任は今も教会に委ねられています。私たちの周囲にいる社会的困難の中に置かれている人々に対して、キリスト教信仰に基づいて奉仕することは、教会の大切な役割です。

もう一つの注意点として、「この世の汚れに染まらないよう自分を守る」ことが挙げられています。私たちは神の聖さと愛を表していくべき神の子ども、神の民です。主イエス様は、失われた者を探して救うために、罪人の友となられましたが、決して罪に染まることはありませんでした。その主イエス様に倣い、主にしっかり結びついていることで「自分を守る」ことができるのです。

信仰生活の中の具体的な事柄を取り上げる前にまず教えられているのは、みことばを聞き、受け入れること、みことばという鏡の前にとどまり、自分の真の姿を見つめること、それとともに見えてくるキリストによって自由をもたらす律法を一心に見つめることです。そうしたことを日々積み重ねていくときに、私たちはみことばを行う人へと育てられていくのです。

試練や誘惑にあうときにも、どのようなときにも、私たちはまず祈って、みことばを聞くようにしましょう。みことばに照らされると、自分の真の姿を見るとともに、キリストの恵みを見させていただけます。キリストの十字架による罪の赦しとキリストのいのちに生かされることを一心に見つめ、信頼しましょう。